

目的 従来 縫製に用いる縫糸の素材は布地と同質のものが適しているというのが一般的概念である。化学繊維の発達、天然繊維の加工などにより各種の布地が市場に出回っている。縫糸については布地の発達にみあう程、開発されていない現状である。即ち、布地は防縮加工されていても、縫製する糸が未加工のために洗たくによるシームパッカリングがあったり、カタン糸の太さ別の糸が少ないためにやむをえず綿布に絹糸を使用したりしている。また、毛織物には布地の厚さ、糸密度に関係なく絹糸50番を使用している。そのため縫い目強度、シームパッカリングなど機能上、外觀上の諸問題がある。一方、ポリエステル糸は種類、太さ、色の種類が豊富である。そこで綿布および毛織物に使用した場合の効果について実験し、縫製の合理化をはかるため再検討を行った。

方法 試料布は綿100%のギンガム、ブロード40番、60番、80番、毛100%のトロピカル二種、糸は綿糸(C) ポリエステルスパン糸(PS)の60番、ポリエステルフィラメント糸(PF)50番、絹糸(S)50番を用いた。試験布は5×25cm、試長20cm、布目方向I-、重ね枚数三種とし、針目数⁵1cm、針11番、上下糸張力はそれぞれの布に適するように調整した。綿布は家庭用洗たく機で10回まで洗たくし、毛織物はドライクリーニングを行い、洗たく後のシームパッカリングについて比較を行った。

結果 綿布では重ね枚数別、布目方行別共にPS糸の方が縫い目じわ、縫い縮み率が小であった。また、毛織物では縫い目じわはいずれも認められなかったが、縫い縮み率はPF糸の方がやや小であった。